11/26

# 全共闘通信

No.3
11/26
全学共闘会議書記局

# 団交を新たなる闘争宣言の場に！

## 権力にはすべてが許される——それがわれわれのみを永続する反逆者に変貌させる……

### 1 市大斗争の現在的局面

10・4以降、行動隊実証を背景として強権的に推進されてきた反当局の正常化路線の弾圧。収拾路線＝大学法実質化＝新たなる自主規制路線）は、日共＝民青と彼らの依拠する秩序派の強力な援護を受けながら進行し、いまや、その最終段階を迎えようとしている。

すなわち、11・10「全学の訴えの会」（2）にて恥なしがもなく公然化された大学当局の意図＝全共闘の追放とその自宅への煮湯し介告部」及び前記の正常化路線の要なる徹底化がその内実である。また、医学部に於ては最も顕著な部分である自護学部斗争への気狂いじみた弾圧にはじまり、学連的医学部（附属病院、無給医）の配転、パージ、教官会議在派部のパージ、医学斗組織の打破しを「授業再開と正常化」が進行しているのだ。

また、この間、大学当局が行なった、いわゆる改革とは、執行体質の変革なるスローガンのような改革への形式的積み重ねが進行されてきたにすぎない。（例えば入改革マワーレになるものか、いかに取繕われば、民青諸君のヘゲモニー下にあるデッチ上げ大学祭ニュースを読めば一目瞭然であろう）

まさに、市大斗争は、全国学園斗争でも前例をみない長期の学園封鎖と、大学当局の弾圧によって一切の後退を未議なくさせられつつある。

2個支を儀式に終わらすな！

以上述べたように、市大斗争は一定の後退局面にあり、そして、当局はそういう状況を認識したが故に、これまで、あれほど拒否し続けてきた入団交ノを、さまざまな制限つきでやっと受諾したのである。

全共斗との団交は決して行なおうとしなかった彼ら当局者が、いまになって団交を受諾した理由は、しかし、上記の状況認識のみではない。では、それは何か？

現在、全共斗を壊滅させたいと思ったがっている）当局にとって最も恐怖すべきの現在の大学の主導権を予備のひとつである産当局の予備が温存されている場所であり、それをおそれる配置制の予備が爆発寸前の状態にある場所だからだ。（しかも、この間理工系院生を中心とする進的部分が、当内の諸、等の担いきとして大量に登場しつつある事実が、当局を一段恐怖せしめている。従って、当局としては理工系の斗争の進化、拡大を絶対に阻止せねばならない。この点に、当局が団交を受諾した理由がある。だが、団交によって当局は何を意図してい

われわれにとって、団交とは、管理者として絶対的権力をもつ教授会に対し、何の権利ももたぬ学生集団が、自らの正当な要求や論理を主張し、それを承認すべき場である。それは、決して単なる話し合いの場でも、いくらでも逃げ道の用意された妥協取の場でもない。それは斗争の場であり、無条件、無制限に、われわれの主張が可能であるべき場でなければならない。権力をもった教授会にのみすべてが許されるへお話し合いの場であってはならない。

もちろん、こういった意味での団交を当